
クーヤんのクニトリ講座

マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クーヤんのクニトリ講座

【Nコード】

N2780Q

【作者名】

マサル

【あらすじ】

本編のクニトリ物語の設定です。人物紹介や背景などは本編に載せる予定ですが、それ以外のモノをここに載せていこうかと思います。

この設定を読まなくても本編には特に支障は無いようにして行けるようにしますが、興味ある方はどうぞごらん下さい。

追記…後で削除したり本編に合流するかもしれません。

クーヤんの魔術講座（前書き）

頭の中で考えていた魔術の理論をとりあえず文章にしてみました。
それは違おうだろうといった指摘や、ここはこうじゃないかといった報告がありましたら連絡を宜しくお願いします。

クーヤんの魔術講座

クーヤんの魔術講座

まず本編でも述べたように魔力とは魔素の集合体という認識から始める。

さて、魔術を使うにあたって理解、読み取り、想像、アクセス、放出といった5つの過程があるがそれを先に説明していこう。

最初に魔術の理解とあるが、これは基礎中の基礎だな。後に続く4つの要素一連の流れを理解しなければならない。

全ての要素に繋がる重要な部分だがそこまで難しいものでもないな。

実際に使う魔術がどういったものかというのを知っていれば問題ない。火系統なら火を灯し、風系統なら風を巻き起こすといったものだ。その魔術がどんな現象を起こすかというのを知っていなければ始まらないからな。

次に読み取り。体内に巡る魔力の流れを感知するという作業だ。まあこれもそれほど難しいものでもない。ようは血管の流れを感じる事によく似ている。

普段ではまったく気にならないが、首筋や手首に指を押し当てると血管が跳ねる鼓動が感じられるだろう。運動した後だとさらに分かりやすいかもしれない。まあ読み取るというのはそんな感じのものだ。

さて想像だが……これは人それぞれだな。例えばとして火系統の魔術を使う場合、空中に炎がいきなり現れるのを想像する者もいれば、

マッチを発火しその周囲を飲み込んでいくのを想像するものもある。方向性の想像は重大だな。その魔術を使って火を灯すのか、標的にどのような軌道で放つのか。どんな規模のどんな軌道を描くかは人それぞれだが、あまりに突拍子もないと次のアクセスで引っかかるので注意しなければならない。

例えば指先に火を灯す魔術で空から火球を降らすような想像をしても失敗するだけだ。

4つ目にアクセスだが、これは教わればなんてことはない。詠唱ならばその言葉と発音があってればいい。術式や魔方陣といった魔術文字も書く文字が間違っていなければ支障はないな。

だがこれが一番重要視されている。発音を一句間違えば、文字を一文間違えば世界と繋がる鍵になりえない。失敗の4割がこの工程だ。

最後に放出だ。これも先程説明したものをこなせていればあとは放つだけで比較的簡単だが、失敗も多い。

中級魔術の詠唱をしておいて、放出した魔力は下級魔術だった場合は世界を騙す力が足りず何も起きない。ラビが暴発したように指先に灯す魔術に火の雨を降らすような魔力を注いだ場合も同じく失敗だ。ようは適正な魔力を注げばいいだけだが、最初はなかなか難しいものだ。失敗の半分がこれに該当する。

ああ、後はそのまま放出するだけか、持続し続けるのもこの要素だ。

さて、少し脱線するが、魔術を早く行う為にどれだけ省略できるかという事は考えられている。5工程のうち省けることが出来るものを説明していこう。

第一工程…魔術の理解。一度理解していれば、使用する時に確認する作業は含まない。

第二工程…魔力の流れ。常に体に流れる魔力を意識していれば、魔力の流れを読む作業は省かれる。

第三工程…方向性の想像は必要だ。その魔術の威力はどれほどか、魔術を向ける対象はどこかなどを決めなければならない。しかし想像と詠唱を同時に行うこともできる。というかそれが主流だ。

第四工程…詠唱はしなければ世界と繋がる事は出来ない。

第五工程…魔力を放出しなければそもそも魔術は使えない。

よって第一工程と第二工程は省くことができる。そして平行作業となるが第三工程と第四工程も同時に行われ時間短縮が可能だ。

しかし無詠唱ということはありえない。それが魔術師達の常識だ。

それじゃ、ここからさらに詳しく説明していこうと思う。

魔素についてと、属性付与についてだ。

ここでは魔素のことを、Maという記号で表す。

魔術の失敗は先程説明した5つの要素が殆どだが、他にも失敗する原因は有る。これから話すことは属性についてだ。

世間の魔術師は相性とか言っているが、事實は多少異なる。元々魔素とは無属性のものとして体内に巡っているのだが、魔術を使う時その魔素に属性が付け加えられる。もちろん無属性のまま魔力を放出する魔術も存在するが、ここでは割愛しよう。

魔素に属性を与える工程は実は無意識で行われている。順番的に言えば読み取りと想像の間だな。体内の魔力を読み取り、その術の方向性を決めている最中に魔素の属性は決められている。

無意識下で行われている作業なのでその事実を知るものは少ないがな。失敗するのはある系統の魔術を使おうとしているが、魔素に他の属性をつけてしまう場合だ。

傾向として一番自分に得意な系統が付与されるな。ラビとアリスはこれに属する。まあ、そういうのを踏まえて相性という言葉で区切るのも悪くないが、この事実を知ること改善出来る可能性がある。

ラビとアリスは無理だ。魔術の情報が魂に刻まれてるから無意識の領域を改善出来そうにない。

次に魔素がどのような動きをしているかだな。例えばとしてやはり火がわかりやすいか。

火系統の魔術を行使する場合、体内に巡る魔素に火の属性を付与する。付与するといっても殆どの場合無意識下なんで、火の魔術を使おうと思えば勝手に付与されるがな。

原子の中にも電子、陽子、中性子といったものがある。陽子、中性子から成り立つ原子核それが魔素のエネルギー、核と言う事だ。つまり属性という因子はその周りに回る電子の部分に当たるな。

魔素の核をMa(核)と表し、属性の部分をe(各属性)とする。今回は火で説明するから、e(火)だな。

つまり、Ma(核)とe(火)が合わさり、Ma(火)とされる。

そのように属性の決められた魔素はその数を増やし、魔力として集まる。大抵掌にその魔力を集めるが、魔力の操り方を知っていれば他でも可能だ。

ここまでの話して火薬の調合が整ったといったところか。

魔素は他の元素と結びつきやすい。この魔素は物質の最小単位原子に干渉して物質を集める。

火で言うなら、酸素(O₂)を媒介とするな。水ならH₂Oだ。

ここでO—OとMa(火)が結びつき、O—O—Ma(火)となる。これでようやく現実世界へ干渉する準備が整った。

弾丸でいうなら葉莢に火薬を詰め、弾頭で蓋をした状態だ。

その後、詠唱や術式などといった世界の鍵、撃鉄ハンマーを起こす作業が行われ、放出といった引き金が引かれる。このような現象により魔術は使われている。

ああ、ちなみに今話した内容を知れば森の中で使った魔術を説明する事も簡単だな。

まず、煙という微粒子を含んだ空氣の固まりにMa(雷)を付与し、吐き出す。だが、それだけだと属性の決められた魔素、火薬を振りまいただけだ。

その次に、葉巻の火が発する光源にMa(光)を結びつけ、魔素を操り空中に留めた。魔方陣を描くためにな。後は想像しながら魔力を放出すればいい。

以上述べたように魔力を、魔素を操るといふのは無意識下の領域をどう制御するかによるところもある。

最初に魔術を広めた者が何故この事を言い伝えなかったのか疑問に感じている。あえて言わなかったのか、それとも理解出来ないという理由で廃れていったかは定かじゃない。

まあ、魔素を知るといふ事は原子を知るといふ事だからな、この時代で理解する事は到底無理な話かもしれない。

以上で魔術の講義を終了する。

寝ているラビと疑問符を浮かべているアリスは配った教科書を読み直すように。

質問は随時受け付ける。ここは変、その考えはおかしいと思う人は連絡をして欲しい。

クーヤんの魔術講座・2限目

クーヤんの魔術講座・2限目

さて、2回目となった魔術講座だが、今回は前回話さなかった事について説明して行こうと思う。

講義の内容は無属性魔術についてだ。

無属性の魔術と聞くと媒介とする原子に無属性の魔素——属性の決められていない魔素『Ma（無）』が結びつくと思う者も居ると思うが、実は違う。

魔素の核『Ma（核）』というエネルギーがあれば使える魔術の総称を無属性の魔術と言う。属性が付けられた魔素でも使えるという事だ。魔吸石に書いた魔法陣や、ラビやアリスの剣に「耐久強化」の魔方阵を描いたのは無属性の魔術なら使えるからだな。

ここで、無属性というのは一体どんな属性か考えてみよう。

属性を取り付けるのは読み取りの工程と、想像の工程の最中。無意識の領域で行われるのは、読み取りの段階で魔素の核、Ma（核）を探し出し、想像の段階でその魔術に合った属性が加わる。火の魔術なら火を想像している時に、水の魔術なら水を想像している時に。では無属性というのはどんな想像をする？

身体能力を上げる、物質を強化する。どのように用いるかの想像は容易いだろう。だが、属性という枠組みに当てはめるとき、それらの属性を想像出来る者は少ないだろう。

無属性なのだから属性の事など何も考えずに行使する。それはつまり、前回話した事に繋がるが、ある系統魔術を使おうとして他の属性をつけてしまう事になる。

無属性のまま魔力を放出する術が存在するのは確かだ。魔素にe（無属性）を取り付けて魔術を放てばいい。だが、それを行う者は少ないだろう。例えば無属性をつけたとしても、使う術に変わりは無いしな。

つまり無属性の魔術というのは、どんな属性だろうと関係なく魔術を行使できる術であるという事だ。

さて、それでは無属性の魔術の一例を挙げていこうか。
本編に出ているのはまだ2つだけだな。物質の耐久強化や魔術の威力強化。

剣や魔吸石に描いた耐久強化を説明しよう。

物質の耐久強化とは、物質の結合力を高めるものだ。

元素の配列や構造を変化させるものではない。炭素のように同素体である、ダイヤモンドとグラファイト（黒鉛）のように構造が異なる物質に変化をさせる事は出来ない。それはもう、錬金術の領域だ。

次に森で使った威力強化について。

魔術の威力強化とは、魔素の密度を増やすということだ。

威力を上げるといって、火や水の量を増すだけならば使用する魔術により多くの魔力を注げばいい。この威力強化というのは、元素と魔素が繋ぎ合わさった物にもう一つもしくは複数魔素を繋げる行為だ。

例えるなら、 $O-Ma(火)$ にもう一つ $Ma(火)$ をくっつけると、 $Ma(火)-O-Ma(火)$ 。という感じになるな。

つまり威力強化とは、単純に火力を上げたり、氷の硬さを増すものではなく、魔素を増やしエネルギーや質を高めるものだ。

他には身体強化なども無属性の領域に入るが……これは魔力を使わずに俺には使いづらい術だ。だが、一応説明しておこう。

身体強化と言われて、まず思い浮かべるのはなんだろうか？ 力が増す、視力が良くなる、刃物を生身で耐える、身体が軽くなってすばやく動ける。等々と言った所か。

筋力の増強で説明が付くと思われがちだが、そうしてしまうと使用後の筋肉痛が物凄い事になりそうだな。それに筋力の増強では力が増すが、その分体重が重くなる。

確かに筋力増強の魔術はある。しかしそれは、下手をすると太い筋肉の断裂の恐れがある諸刃の剣だ。身体強化を使った方がいいが、使用後動けなくなる場合はこの魔術の副作用だ。まあ、筋力強化と超回復の2重魔術なら痛みも感じずに居られるかもしれないがね。そんなのラビ、アリスクラスの魔力量が無いと不可能だ。

俺が推奨するのは魔術による補助具を体に付けるというものだ。先ほど挙げた例を言うならば、

1. 力が増す——擬似筋肉による補助。魔素がカーボンナノチューブのように円筒状の構造になった物が擬似筋肉として元の筋肉の手助けをするといった感じだ。

2. 視力が良くなる——擬似レンズによる補助。まあ、魔力による眼鏡とでも捉えてもらえばいいか。すごい者は眼鏡どころか、望遠鏡のレンズを作るけれどな。

3. 刃物を生身で耐える——身体変化による皮膚の硬質化もありはするが、それも錬金術の領域になるな。防弾チョッキなどに使われる防弾繊維と同じく、繊維の役割を魔素が幾重にも織り込まれていると考えればいいだろう。

難しい言い方などせず、障壁を張るとも言った方がいいか。

4. 身体が軽くなってすばやく動ける——軽い重力操作、瞬発力を出す筋力の強化もしくは擬似筋力による補助だな。

無属性の魔術は以上……ああ、後もう一つ説明しておく。魔術ではないが。

魔力酔いという現象についてだ。

強大な魔力がその体からもしくはその場から漏れ出したら、その周りに居る者が眩暈や吐き気などを催すものだ。

これは魔素が大気中に存在する分子や元素に取り付いて周囲に撒き散らしている事によるものだ。大気成分というものは窒素（ N_2 ）が約78%、酸素（ O_2 ）が20%、残り2%は様々な分子

や元素によって構成されている。

この大気の中で割合が高い窒素に、溢れた魔素は取り付いて空中に漂う。つまり強大な魔力があるというのは、窒素を集積してその濃度を上げているという事だ。

窒素はすべての生物にとって必須の元素だ。

しかし、窒素ばかりが多いとその大気中の酸素濃度が減ってしまふ。窒素という名称も、窒息させる元素として名付けられたものだしな。

さて、大気中の酸素濃度が減ってしまうとどうなるか。知っている者も多いと思う。酸素が欠乏すると、頭痛、はきけ、集中力の低下、眩暈、果ては昏睡や呼吸停止に陥ってしまう。

つまり魔力酔いというのは、正確に言うとも魔力に酔うのではなく、大気中の酸素濃度低下による酸素欠乏の症状と言う事だ。

以上でこの時間の講義は終了だ。

次は本編でも研究中の魔素汚染の事について話して行こうと思う。

クーヤンの能力講座・変化編

クーヤンの能力講座・変化編

さて能力講座第一弾となったわけだが、まずは変化^{へんげ}という力から説明しよう。

変化^{へんげ}とは文字通り身体を変化させるモノだ。

「いや、ちょっと待ってくれ。なんで俺達は此処にいるんだ？」

「何言ってるんですかイースさん。僕が教えて欲しいと言ったんですよ？」

変化には三種類に分類されるというのが俺の考えだ。膨張、幻術、変形、この三つ。

「うお、無視して始めやがった」

「イースさん話を黙って聞くんす」

一つ目の変化はシルバが見せた膨張だ。膨張は変化の中で一番基本だ。亜人の一部に備わる特殊能力として主に知られている。亜人の変化はそのほとんどが膨張に分類されるものだ。

「いやあ、吃驚したな。亜人の中に姿を変えるのは居ると聞いていたが、見るのは初めてだったぜ」

膨張は珍しいというモノでもない。俺達にだって出来る。いや、大抵の生物だったら誰だって可能だ。まあ、その場合は海綿体に血液が溜まっている状態だけれどもな。

「あゝ、なるほど……っていやいや、起ったからって別に毛むくじやらないっすよ」

シルバがやった膨張は難易度が高いやつだ。

その機構は筋肉をバンプアップさせ太く増量、肥大化させ、さらに回復が伴う。

バンプアップは筋肉に激しい負荷が加えられるとその部位の血流量が増し、一時的に筋肉が太く膨張する事だ。つまり、血流量を増やして太くしているという所は同じだな。

そしてそのバンプアップは一時的に筋肉細胞を壊している状態でもある。その壊れた筋肉を治そうと身体が回復を即し、副次的に体毛なども急成長する。ちなみにこの変化で骨の成長などは含まれない。

そして元に戻るときはその逆を辿るな。血流量が減少し、膨張した筋肉は萎んでいく。伸びた体毛は急成長をした分だけ死滅も早く、抜け落ちていく。脱毛というのは毛根が死滅した時に起きる現象だしな。

「ふむ、なるほど。しかし骨が成長していないのは本当ですか？」

骨は変わっていない。

骨が変わっているように見える場合は、元々その身体に骨があったという場合だろう。人以外の動物には陰茎骨という骨を持つ動物もいるからな。

この膨張は元々それぞれの動物に近い形をしている亜人だからこそ可能な変化だ。よく人間が狼へと変わるような狼男の話を聞いた事があるだろうが、それは後で話す幻術もしくは変形だと考えてい

る。

「しかし……なぜあいつ等は変化したままの姿で過ごしていなんんだ？」

確かに膨張により驚異的な身体能力を得ることが出来るだろう。だが、俺達が膨張したままの状態を考えてみてくれ。

「……起ちっぱなしは疲れるっす」

その通り。血流量が常に増大したままでエネルギーの消費が普段の人型よりも多い。そして普段生活する分にも膨張したままだと不便だ。つまり戦闘以外必要の無い変化だからだろう。

さて次は幻術だな。

これは文字からも分かるように、単なる幻術によって身体を変化させているように見せているだけだ。身体は何の変化も行われていない。構造としては最も単純だな。

「しかし……そんな事してなんか意味有るのか？」

意味はある。

この幻術変化の機構には自己暗示と周囲への幻覚だ。

まず自己暗示により自分が獣へと変化すると暗示をかける。自己暗示を馬鹿にしてはいけない。いくつかの制約の元に驚異的な身体能力を得る事が出来るだ。言い方を変えれば、脳のリミッターを外すという風にも言えるのだからな。

そうして自分を獣と思い込ませ、その周囲にも自分が獣に変化したと思い込ませるように幻覚を行う。ある魔術師がドラゴンへとその身を変化させる状況を想像すればいい。それがどれほど恐ろしい事かわかるか？

「人が竜に変わるってのは怖いが、それほど恐ろしいもんか？ 実体は変わってないんだろ？」

幻術により変化した者がその場から消えたでしょう。それはその者の身体能力が上がって視界から消えたのか？ それとも相手が目に追えない速度を体現しようと幻覚を見せて消えているのか？ その相手が行き成り目の前に出現した。それは現実か？ 幻覚か？ 相手が腕を振るい攻撃を受けた。身体から流れる血は現実か？ それともそう知覚しているだけか？

「むう、確かに……そりゃ怖いっす」

そう、つまりその周囲に居る者は幻覚にかけられているという事が恐ろしい。まあ、そこまで幻術を扱える者が少ないのは確かだな。

大抵の者は単なる身体強化、自己暗示、自分を獣に見せる幻覚だけ。しかし、ドラゴンへ変化するような魔術師も居る事を頭に置いておかねばならない。そんな魔術師は幻術の扱いに長けている。

さて、最後に変形だ。

変形と聞くと機械が形を変えるのをまず思い浮かべるが、あれはただその配置が変更しただけだな。変化の変形とは身体のエレメントを用

いて組み替える方法だ。

ナノマシン、錬金術。正確に構造を変える方法は今の所二つ考えられるが、どちらにせよ分子や原子を別の分子・原子へと作り変え、構造を組み替える方法を取る。ちなみにもう一つ、原子同士の衝突させることで別の物質を作る方法もあるが、上記二つよりも細かい内容では無いので省く。

「「????」」

「えっと……その分子・原子という物は……」

所詮この世界は物質世界。

それぞれの物質は分子の集まりで、分子は原子の集まりでしかなく、原子は電子・陽子・中性子の集まりでしかない。このそれぞれが結びつけばそこに物質として存在できる。そしてもし、この構造を人為的に組み替える事が可能であれば、鉄を金に変える事も出来るんだ。有機物を無機物へと変換させる事も可能だ。

まさに錬金術。その応用性は限りが無い。

変形を行う者は大抵ある程度の型を持っている。そしてその型は持っていたとしても数個だ。ルーシィのように様々に変化できる事の方が稀だ。

例として吸血鬼が霧へと変化する状態をあげるか。

霧へと変化するのには霧という型を持っているためだろう。身体は分子構造をバラバラに分解し、移動した後集合するという一連の流れを含んだ状態だ。人の身体を構成する分子は60〜70%ほどが水分だしな。

ああ、吸血鬼についてだが身体の一部を獣に変化するのもあるな。

それはその獣と契約を行い、体内に住まわせ、それを召喚している状態だろう。変形を用いて知能を与えさせるという方法も無くはなさそうだがな。

変形を行う際には型というどのように変化させるかの想像が無くてはならない。型が無ければそれはもう無秩序な化物のようにしかないのだ。

「「……………」」

後はまあ、芋虫からさなぎへ、さなぎから蝶へ変化するような場合もあるな。これは変形の種類だ。さなぎの中身はどろどろになって蝶への体へと作り変えている。この脱皮は不可逆的な変化だ。元に戻る事はもうない。

また脱皮を応用した方法もある。別の生物の皮を用いて元の身体をその中に仕舞い込む場合だ。人の皮を被ったという言葉があるが、これは本当に皮を被る方法だ。これを俺はそのまま脱皮と呼んでいる。

周りで見ている連中は変化しているように感じられるが、元からあるものを仕舞い込んでいるだけで身体の変化は特に無い。そして皮を破って出た中身が再び同じ皮へ戻る事も出来ない。

幻術も身体的な変化は無いので、この脱皮は変化の一種類に数えられるでもいいが……この変化は不可逆的なものだ。

進化、退化、成長、脱皮。不可逆的な変化は色々あるが、俺は可逆出来るモノを変化と分類している。それ以外のはそれぞれの呼び

名で呼んでいるんだ。

ああそうそう、虫やカメレオンなどでも見られる色の変化もあるな。呼び名は擬態だ。

これは可逆なものであるのだから変化の一種に入りたい所だが……やはり変化と呼ぶからには視覚的に形が変わっているモノを言いたい。身体の色に変化はあるが、形が変わらない擬態はやはり変化に含んでいない。

つまり身体的または視覚的に形が変わっていて、可逆出来るものを変化と分類しているんだ。その種類は膨張、幻術、変形の三つ。

形が変わるなんてのは種類がかなり多いからな。この三つ以外にもあるだろうが、俺としての考えはそんな所だ。

以上で変化^{へんげ}についての説明を終える。

分子原子についてこれから説明するからウイムさんは聞いてくれ。その前に眠りこけているイースさんとシヨルさんに毛布かけないとな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2780q/>

クーヤんのクニトリ講座

2011年7月10日21時46分発行